

金曜 ライフ・楽しむ

シニア世代を応援するページです

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利さん



近年、SNSなどで人の書く文章を読む機会が増えました。ある知人が病床にあり、「痛くて辛い、だが頑張りた」という日々の思いをつづっています。文章の中に誤字、脱字や誤用がたくさんあり、私を知る彼の注意力や性格からは想像できず、「それほど体調が悪いのか」と内容以上に重篤さが伝わってきました。推敲を重ねる作業が困難なのかもしれません。



と、ここまで書いて冷や汗が出てきました。生意気を言いましたが書く仕事をしていて誤字、脱字に誤用は決してひとごとではありません。特に最近は一プソフトを使うので、読み方だけ入力するとどんなに難しい漢字も即座に変換されて画面に現れます。思い込みがあったり、流れで読み飛ばしたり、こんなだったなあと深く確認せず選び、エライ目に遭います。

また、ワープロソフトでは思いもよらない誤変換に出くわすことがあります。さっきも「書く仕事」が「隠し事」と出て、間違いの過去は隠すべきだったかと少し反省しました。シニアに仲間入りして「将来が気になる」と書くつもりが、「将来ガキになる」となったときは、年をとって

わがままな子供に戻ってしまった大先輩を思い出しました。「特別養護老人ホーム」が「特別酔う御老人ホーム」になったときは、そこかしこで、くだを巻く赤ら顔のお年寄りを想像して、介護スタッフはいつも大変だろうな、と同情を禁じえませんでした。



名前にも注意が必要で、渡邊、齋藤、山崎、高橋さんらは特に気を使います。「真鍋」も「真鍋」の人がいます。が、近しいので間違えても洗顔をされるだけで済みません。私が発行する情報誌が100号を迎えたとき、ある新聞(本紙ではありません)に

取材を受けました。その記事の中に「真鍋」が数回出てきますが、1カ所だけ「真壁」になっていました。「知らない人がひとり交じっていますよ」とお知らせしたところ、大変恐縮されましたが、当事者だからこそ気付いただけではないと思います。逆に、新聞でもこんな間違いをするのだとホッとしたものです。

私も、ぎりぎりまで校正をしますが、残念ながら間違いはゼロにはなりません。何度も見直したつもりでも、見落としがあります。いつも手が離れてから、心が騒ぎます。間違い探しに熱心な読者がいて、「今回は2カ所見つけたよ」と知らせてきますが、そのたびに「負けた!」と思ってしまう。今後間違っても見守っていただきたくお願い申し上げます。